

## 民間スポーツクラブ会員の社会階層とライフスタイルに関する研究

宮内 邦典 丸山 富雄

キーワード：民間スポーツクラブ、社会階層、スポーツライフスタイル

### A study on the social stratification and lifestyle of private sports club members

Kuninori Miyauti Tomio Maruyama

#### Abstract

The purpose of this study was to clarify the social stratification and life style of the members of a private sports club. A questionnaire survey was administered to 400 members of "A" sports club (membership was 3000) in Fukushima City. Questionnaires were handed out to participants at the club and mailed back in October, 2003. Items surveyed were sex, age, social status indices, sporting lifestyle, past sport experiences, and sports participating at present. Characteristics and social statuses were compared with by cross computations and mean values obtained. Also, cluster analysis was applied for clarifying sports lifestyle. The results were summarized as follows:

1. The membership was consisted of 38.5% males and 61.5% females, and members at 60 years and older were 37.8%, 50s 24.1% 40s 20.7 and 30s 17.4%.
2. As to educational background, high school graduates were 43%, 4-year college and graduate school 23.3%, 2-year college and professional school 20.7%, and junior high school 11.5%.
3. For job status, part-timers (146) exceeded full-timers (123), and the rate of house wives was 30.7%.
4. Participants showed strong awareness on health and leisure pursuits, and about 30% of the participants fell into a cluster of "active lifestyle".

Key words : private sports club, social stratification, sports lifestyle

#### 1. はじめに (研究目的)

日本の戦前では、階層の差が社会の中に実体として存在した。その人が何者であるかは、社会調査によって調べるまでもなく、その人の身なり、話す言葉、居住する地域等にはっきりと表れていた。

ところが第二次世界大戦後の日本では、社会階層は実体としてつかみにくくなっている。今日、昼間のオフィ

スでならともかく、休日の行楽地で遊ぶ人のなかで、人々の階層差を認識することができるだろうか。もし東京ディズニーランドなどで遊ぶ家族の中で、そのようなえり分けを行ったとしても、その精度はかなり低いものになってしまうだろう。あるいは、自分と誰かを引き比べて、戦前のような階層の違いをはっきりと線引きができるだろうか。また、そのような格差を感じたことがあるだろ

うか、このように現代の階層とはとても曖昧なものになっている。しかし、現実には何らかの不平等があることも、多くの人々の実感ではないだろうか。

第二次世界大戦後、高度経済成長期を境として、社会階層をめぐる状況は大きく変化した。人々の関心が物質的な経済活動・分配様式に関わるものから、文化活動・生活様式に関わる脱物質的なものとなり、ものの豊かさをあらかず達成的地位指向から、心の豊かさをあらかず関係的地位指向を重視するようになってきた。だからといって、階層間の格差が消滅し、平等な社会が到来したわけではない。このことは、社会一般だけでなくスポーツについてもいえることではないのだろうか。

一般に社会階層とは、「社会的資源ならびにその獲得機会が、人々のあいだで不平等に分配されている社会構造状態を表示する、整序概念」<sup>14)</sup>と定義されている。

社会階層を測る指標として、具体的にはSSM (social stratification and social mobility) 調査では6つ(「職業(威信)」、「学歴」、「所得」、「財産」、「生活様式」、「勢力」)の項目が挙げられる。そのうち、「職業(威信)」「学歴」「所得」の3つは基本的指標であり、伝統的な社会階層を構成する項目である。本調査では、社会的地位をはかる指標として「職業(威信)」「学歴」「所得」の3つに「生活様式」を加えた4つの指標を用いた。

しかし今日では、SSM調査で特定された階層間に横断的に存在する余暇活動、「生きがい」等の指標を加えるべきだとの指摘<sup>4)</sup>もある。そこで本研究では、「生きがい等」の指標を、北村らの「スポーツ参加者のスポーツライフスタイルとコミュニティ感情」で用いられた27のスポーツライフスタイル項目とした。

民間スポーツクラブ会員の社会階層は丸山<sup>9)</sup>らによってかなり高いことが指摘されている。しかし、今日のスポーツクラブはそのクラブのコンセプト、客層も多様になってきており、かつてのような社会階層の上層や若年エリート層だけが通うものではなくなっていることが予想される。そこで本研究では、SSM調査の4項目の社会的地位指標と北村ら<sup>6)</sup>の27のスポーツライフスタイル項目を加えた調査を行い、民間スポーツクラブ会員の社会階層について明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

1. 調査対象：福島市Aスポーツクラブ会員400名(会員数：約3000名)
2. 調査期間：平成15年10月20日から1週間
3. 調査方法：福島市Aスポーツクラブにてスポーツクラブ会員に調査票を手渡しし、郵送による返信とした。
4. 回収数：270部(回収率：67.5%)
5. 調査内容：属性(性別、年齢)、社会的地位指標(学

歴、職業、所得、生活様式)、スポーツライフスタイル、過去のスポーツ歴、現在行っているスポーツ

6. 分析方法：会員の属性、社会的地位に関してはクロス集計および平均値による比較によってその特徴を明らかにした。さらに、スポーツライフスタイルを明らかにするため、クラスター分析を行った。

### 7. 変数の構成

#### 1) 社会的地位

基本的地位変数である職業、学歴の区分はSSM調査のカテゴリーを採用し、所得に関しては表2のとおり4段階に分類した。

#### 2) 生活様式(余暇活動)

生活様式はSSM調査の6つの項目の1つであり、文化的な生活様式の享受を意味する余暇生活機会の程度をあらわした補助的地位変数である。質問項目は全部で9項目あり、「映画を見に行つた」「友人を食事に招いたり、招かれたりした」「小説や歴史の本を読んだ」など旅行、スポーツ、読書、観劇・観賞、稽古についての内容となっている。この9項目からなる余暇生活機会を「かなりある」「少しある」「ない」の3段階で回答するかたちをとった。そして「かなりある」を2点、「少しある」を1点、「ない」を0点と点数化し、9項目の点数を足した得点を余暇得点とした。そして、余暇得点0~1を「余暇スコア1」とし、余暇得点2~3を「余暇スコア2」、余暇得点4~5を「余暇スコア3」、余暇得点6~7を「余暇スコア4」、余暇得点8~を「余暇スコア5」とした。

ただし、本研究では「余暇スコア1」については人数が少ないため、比較のときは5段階ではなく「余暇スコア1」と「余暇スコア2」を「余暇スコア1」とし、「余暇スコア3」を「余暇スコア2」とし、「余暇スコア4」を「余暇スコア3」とし、「余暇スコア5」を「余暇スコア4」と4段階とした。

#### 3) スポーツライフスタイル

北村らは、次の手順によってスポーツライフスタイル項目を抽出している。

ライフスタイルをAIO (Activities, Interests, Opinions statement) と呼ばれる一連の変数群によって測定するが、AIOの測定には「当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の5段階のリッカート・タイプ尺度を用い、評点順にそれぞれ5、4、3、2、1の得点を与え、間隔尺度を構成するものと仮定して数量化した。そして、27のAIO項目に対して因子分析(主因子法、バリマックス直交回転)を施し、8つの因子を抽出している。27のAIO項目と抽

出された因子は以下のとおりである。

『北村らのスポーツライフスタイル項目』

①流行・革新

- ・人よりも先に新しいスポーツ用品を試すことが多い
- ・新しいスポーツ用品が出ると買ってみたいことが多い
- ・新しいものや変わったスポーツ用品を試すのが好きだ
- ・流行のスポーツウェアを持っている

②コミュニケーション

- ・運動やスポーツについて友人と長時間話し合うことがある
- ・スポーツ活動に関してよく知人に相談する
- ・スポーツに関して友人や知人からよく相談を受ける
- ・スポーツの話をするのは非常に楽しい

③スペクテーター

- ・スポーツ観戦が好きだ
- ・スポーツの試合を見たり聞いたりするのが好きだ
- ・新聞のスポーツ欄はだいたい読む

④健康

- ・スポーツで健康な体を維持できる
- ・定期的にスポーツや運動を行っている
- ・運動やスポーツは健康に欠かせない
- ・他人よりも自主的にスポーツに取り組んでいる

⑤コミュニティ

- ・地域で行われるスポーツ行事には積極的に参加する
- ・地域のスポーツ活動の手伝いをするのが好きだ
- ・地域の仲間たちとスポーツを一緒にしたい
- ・地域のスポーツクラブで積極的に活動している

⑥芸術

- ・スポーツは芸術である
- ・スポーツマンの身体美にあこがれる
- ・スポーツをする姿は美しい

⑦レジャー探索

- ・やりたいことがたくさんある
- ・スポーツだけでなくいろいろなことをしてみたい

⑧勝利

- ・スポーツは勝つことに意義があると思う
- ・スポーツで人と競うのが好きだ
- ・勝敗にこだわらず楽しくスポーツを行っている

本調査では、これらの8つの因子ごとに平均と標準偏差を算出し、平均値±1/2標準偏差によって3段階に分類し、「上位」「中位」「下位」とした。3段階のカテゴリー分布は以下の表のとおりである。

表1 スポーツライフスタイル因子のカテゴリー分布

因子(n)	下位(n)	中位(n)	上位(n)
流行・革新	~6(105)	7~10(74)	11~(91)
コミュニケーション	~8(89)	9~12(94)	13~(87)
スペクテーター	~8(78)	9~11(81)	12~(111)
健康	~15(89)	16~17(78)	18~(103)
コミュニティ	~7(94)	8~11(89)	12~(87)
芸術	~8(67)	9~11(108)	12~(95)
レジャー探索	~6(59)	7~9(151)	10~(60)
勝利	~7(74)	8~10(118)	11~(78)

III. 結果および考察

1. サンプルの属性

表2 サンプル属性

属性	人数	%
<b>性別</b>		
男性	104	38.52
女性	166	61.48
合計	270	
<b>年齢(270)</b>		
~30代	47(男:20 女:27)	17.41
40代	56(男:27 女:29)	20.74
50代	65(男:22 女:43)	24.07
60代~	102(男:35 女:67)	37.78
<b>最終学歴(267)</b>		
中学校卒業	31	11.48
高等学校卒業	116	42.96
短大・専門学校卒業	56	20.74
大学・大学院卒業	63	23.33
その他	1	0.37
<b>職業</b>		
正規仕事(有り:123)	男:82 女:41	
専門職	16	5.93
準専門職	24	8.89
管理職	14	5.19
事務職	30	11.48
販売関係	7	2.59
労務職	6	2.22
農林業・従業者	1	0.37
その他	25	9.26
正規仕事(無し:146)	男:22 女:124	
パートタイム	12	4.44
主婦	83	30.74
退職者	38	14.07
一時仕事を休んでいる	12	4.44
その他	1	0.37
<b>収入(268)</b>		
~400万円	50	18.66
400万円~700万円	86	32.09
700万円~1000万円	76	28.36
1000万円~	56	20.90
<b>生活様式(270)</b>		
余暇スコア1	10	3.70
余暇スコア2	33	12.22
余暇スコア3	68	25.19
余暇スコア4	84	31.11
余暇スコア5	75	27.78

サンプルの属性については、表2のとおりである。

有効回答者の属性については、性別では男性が38.52%、女性が61.48%と女性が若干多く、年代別では30歳代以下、40歳代、50歳代の順となっており、60歳代以上は37.8%と最も多くなっている。

最終学歴に関しては、「高等学校」が最も多く、次いで「大学・大学院」、「短期大学・専門学校」、「中学校」の順である。

所得については、「400万円～700万円」と「700万円～1000万円」が30%前後となっており、「400万円未満」と「1000万円以上」が20%程度を占めていた。

職業では、正規の仕事を持っている人よりも正規の仕事を持っていない人の人数が若干多くなっている。正規の仕事を持っている人の中では、「事務職」が最も多く、次いで「準専門職」、「専門職」、「管理職」となっている。しかし、全体で見ると「主婦」が30.74%と最も多く、全体の約3割を占めていた。

生活様式については、「余暇スコア1」が少数であるが、「余暇スコア3」、「余暇スコア4」、「余暇スコア5」には大きな人数の違いは見られなかった。

## 2. 活動の形態

### 1) 1週間の活動日数

会員の1週間のクラブでの活動日数は、週3回が最も多いが、2回から4回が大半を占めていた。

表3 活動日数

	人数	%
週1回	26	9.77
週2回	63	23.68
週3回	78	29.32
週4回	60	22.56
週5回	22	8.27
週6回	17	6.39
総計	266	100

### 2) 1回の活動時間

スポーツクラブでの1回の活動時間は約半数が2時間で、約8割は2時間以下という結果である。

表4 活動時間

	人数	%
1時間	73	27.44
2時間	143	53.76
3時間	35	13.16
4時間	12	4.51
5時間	3	1.13
総計	266	100

## 3) 参加状況

9割近い会員が、スポーツクラブに「定期的に参加している」、「日常に支障がない程度に参加している」と回答し、非常に積極的な姿勢で参加していることがわかる。

表5 参加状況内訳

	人数	%
定期的に参加している	112	41.79
日常に支障がない程度に参加	129	48.13
気の向いたときだけ参加	25	9.33
他のメンバーに誘われた時	0	0.00
その他	2	0.75
総計	268	100

## 3. 入会動機

一般に、入会動機やその効果に関しては、生理的な動機（第一次的動機・効果）、社会的な動機（第二次的動機・効果）、自己実現的動機（第三次的動機・効果）に分類される。そこで以下のような設問項目を対応させ、会員の属性とクロス集計を行った

### 【生理的な動機】

- ①健康や体力の保持増進のため
- ②美容や肥満予防のため
- ③気晴らしやストレス解消のため

### 【社会的な動機】

- ①友達づくりや親睦を深めるため
- ②クラブに入会することが社会や近所の人たちとの交際に役立つと思うから
- ③クラブの人気や評価が高いから

### 【自己実現的動機】

- ①スポーツ技術の向上
- ②試合やゲームを楽しむため
- ③精神的な修養のため

### 1) 性別による比較

会員全体の動機は生理的動機が男女とも圧倒的に高く、性別にみると生理的動機では男性より女性のほうが高くなっている。社会的動機は一般に女性のほうが高いとされているが、ここでは男性の方が高い結果となった。

表6 性別の入会動機 (複数回答)

	男性	女性
生理的動機		
①	93.2%	98.2%
②	52.4%	63.6%
③	64.1%	97.3%
社会的動機		
①	21.4%	14.5%
②	1.0%	1.2%
③	1.0%	1.2%
自己実現的動機		
①	18.4%	14.5%
②	7.8%	7.9%
③	7.8%	7.9%

2) 年代別比較

どの年代も生理的動機が高い数値を示している。回答数の多い各動機の①の質問項目をみると、社会的動機では年代が上がるにつれて数値が高くなっており、逆に自己実現的動機は若い年齢層が高い結果となった。

表7 年代別の入会動機内訳 (複数回答)

	～30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
<b>生理的動機</b>				
①	97.9%	92.9%	96.9%	97.0%
②	53.2%	69.6%	65.6%	52.5%
③	63.8%	62.5%	73.4%	64.4%
<b>社会的動機</b>				
①	10.6%	17.9%	12.5%	22.8%
②	2.1%	0.0%	0.0%	2.0%
③	2.1%	0.0%	1.6%	1.0%
<b>自己実現的動機</b>				
①	21.3%	17.9%	14.1%	13.9%
②	4.3%	10.7%	1.6%	11.9%
③	1.7%	3.6%	6.3%	6.9%

4. 民間スポーツクラブ会員の社会階層

ここでは、会員の社会階層(学歴, 所得, 生活様式の3つの社会的地位指標)について性, 年齢ごとに比較を行った。

1) 学歴

女性では「高等学校」が半数を占め、「中学校」, 「短期大学・専門学校」の比率も男性より高い。一方男性は「大学・大学院」の比率が非常に高く、高学歴者が会員となっている。年代別では40歳代の会員は「大学・大学院」が高くなっており、60歳代以上の会員は他の年代に比べて「中学校」が突出している。

表8 性別の学歴

	中学校	高等学校	短大・専門	大学・大学院	その他	総計
男子	6.8%	33.0%	15.5%	43.7%	1.0%	100.0%
女子	14.6%	50.0%	24.4%	11.0%	0.0%	100.0%
全体	11.6%	43.4%	21.0%	23.6%	0.4%	100.0%

表9 年代別の学歴

	中学校	高等学校	短大・専門	大学・大学院	その他	総計
30代以下	2.1%	38.3%	31.9%	27.7%	0.0%	100.0%
40代	1.8%	33.9%	25.0%	39.3%	0.0%	100.0%
50代	6.3%	49.2%	27.0%	17.5%	0.0%	100.0%
60代以上	24.8%	47.5%	9.9%	16.8%	1.0%	100.0%
全体	11.6%	43.4%	21.0%	23.6%	0.4%	100.0%

2) 所得

所得が「～400万円」の会員と「400万円～700万円」の会員では、男性よりも女性の比率が高くなっているが、「700万円～1000万円」, 「1000万円～」の会員では、逆に女性より男性の比率が高くなっている。年代別にみると50歳代の「400万円～700万円」がやや高いが大きな

差は見られなかった。

表10 性別の所得

	～400万円	400～700万円	700～1000万円	1000万円～	総計
男性	16.3%	28.8%	30.8%	24.0%	100.0%
女性	20.1%	34.1%	26.8%	18.9%	100.0%
全体	18.7%	32.1%	28.4%	20.9%	100.0%

表11 年代別の所得

	～400万円	400～700万円	700～1000万円	1000万円～	総計
30代以下	19.1%	27.7%	29.8%	23.4%	100.0%
40代	20.0%	30.9%	29.1%	20.0%	100.0%
50代	16.9%	41.5%	24.6%	16.9%	100.0%
60代以上	18.8%	28.7%	29.7%	22.8%	100.0%
全体	18.7%	32.1%	28.4%	20.9%	100.0%

3) 生活様式

全体では、「余暇スコア3」, 「余暇スコア4」, 「余暇スコア2」の順となっており、「余暇スコア1」は16%程度であった。性別にみると、男性は女性に比べ「余暇スコア1」, 「余暇スコア3」の割合が高く、女性は「余暇スコア2」が高くなっている。年代別の比較では、周辺分布と比較し「40歳代」の「余暇スコア1」, 「60歳代以上」の「余暇スコア2」, 「50歳代」の「余暇スコア4」が高い値となった。

表12 性別の生活様式

	余暇スコア1	余暇スコア2	余暇スコア3	余暇スコア4	総計
男子	21.2%	16.3%	35.6%	26.9%	100.0%
女子	12.7%	30.7%	28.3%	28.3%	100.0%
全体	15.9%	25.2%	31.1%	27.8%	100.0%

表13 年代別の生活様式

	余暇スコア1	余暇スコア2	余暇スコア3	余暇スコア4	総計
30代以下	14.9%	25.5%	29.8%	29.8%	100.0%
40代	25.0%	19.6%	28.6%	26.8%	100.0%
50代	16.9%	18.5%	29.2%	35.4%	100.0%
60代以上	10.8%	32.4%	34.3%	22.5%	100.0%
全体	15.9%	25.2%	31.1%	27.8%	100.0%

5. 会員の属性および社会階層とスポーツライフスタイル

ここでは、会員の属性(性, 年齢)および社会階層, 具体的には学歴, 所得, 生活様式の社会的地位とスポーツライフスタイルの関係を分析した。

1) 性別のスポーツライフスタイル

「芸術」, 「レジャー探索」を除き、いずれのスポーツラ

イフスタイル項目においても、男性のほうが高い値を示し、特に「流行・革新」、「スペクテーター」、「コミュニティ」、「勝利」、の項目において統計的にも有意な差が見られた。特に「勝利」に関しての男女差が大きく現れた。

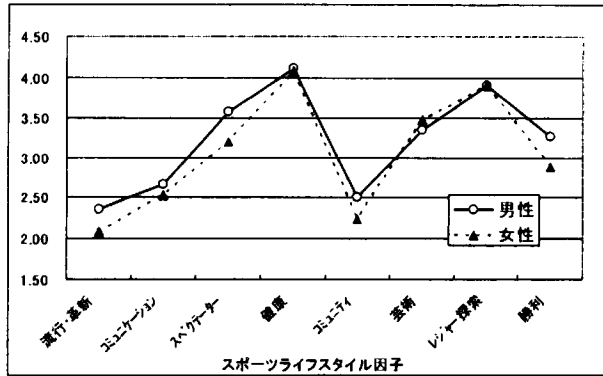


図1 性別のスポーツライフスタイル

表14 性別のスポーツライフスタイル

上段：平均値 下段：標準偏差

	流行 革新	コミュニ ケーション	スペク テーター	健康	コミュニ ティ	芸術	レジャー 探索	勝利
男性	2.35	2.66	3.58	4.12	2.50	3.35	3.90	3.27
女性	1.12	0.92	1.10	0.69	0.96	0.96	0.95	0.73
合計	1.00	0.91	1.15	0.65	0.94	0.93	0.92	0.74

2) 年代別のスポーツライフスタイル

40歳代が「健康」「レジャー探索」以外の5項目で最も高い値を示しているが、「レジャー探索」に関しては、年代が低いほど「レジャー探索」の値は高くなっており、30歳代以下と60歳代以上、40歳代と60歳代以上に統計的にも有意な差がみられた。

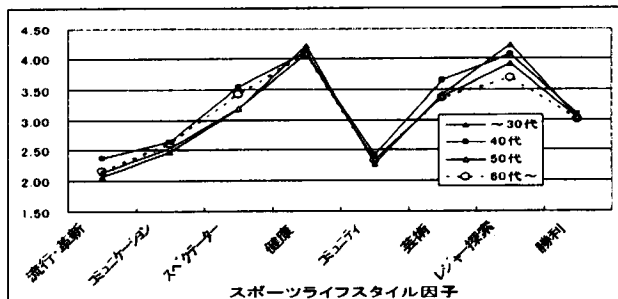


図2 年代別のスポーツライフスタイル

表15 年代別のスポーツライフスタイル

上段：平均値 下段：標準偏差

	流行 革新	コミュニ ケーション	スペク テーター	健康	コミュニ ティ	芸術	レジャー 探索	勝利
~30代	2.06	2.47	3.18	4.21	2.28	3.41	4.21	3.04
40代	2.37	2.64	3.54	4.09	2.42	3.64	4.06	3.10
50代	0.97	0.92	1.10	0.71	0.99	0.90	0.86	0.71
60代~	2.14	2.52	3.19	4.07	2.33	3.38	3.92	3.04
	1.08	0.91	1.19	0.73	0.89	0.94	0.92	0.80
	2.17	2.61	3.42	4.05	2.32	3.36	3.68	3.00
	1.00	0.89	1.16	0.64	0.98	0.92	0.96	0.76

3) 学歴とスポーツライフスタイル

学歴別のスポーツライフスタイルの平均値をまとめると、図3のとおりである。「レジャー探索」の項目において、中学校の値が他に比べ極端に低く、短期大学・専門学校および高等学校と中学校とのあいだで統計的にも有意な差がみられた。

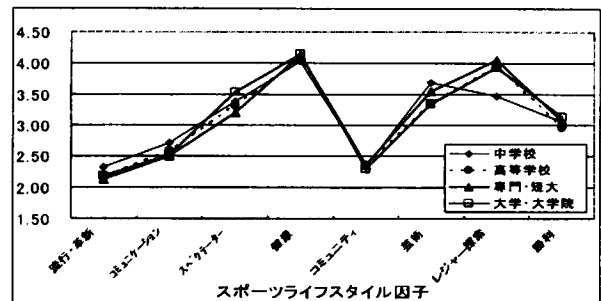


図3 学歴別にみたスポーツライフスタイル

表16 学歴別のスポーツライフスタイル

上段：平均値 下段：標準偏差

	流行 革新	コミュニ ケーション	スペク テーター	健康	コミュニ ティ	芸術	レジャー 探索	勝利
中学校	2.32	2.71	3.38	4.03	2.34	3.69	3.47	3.05
高等学校	0.90	0.74	1.16	0.63	0.90	0.98	1.14	0.61
専門学校	2.17	2.59	3.31	4.06	2.35	3.35	3.95	2.96
短大	0.99	0.95	1.12	0.62	1.00	0.86	0.83	0.78
大学	2.13	2.50	3.19	4.14	2.36	3.55	4.06	3.06
大学院	0.99	0.85	1.21	0.73	0.79	0.89	0.89	0.72
	2.18	2.52	3.53	4.15	2.30	3.33	3.94	3.13
	1.04	0.96	1.08	0.64	0.97	1.00	0.94	0.71

4) 所得別のスポーツライフスタイル

図4は所得別のスポーツライフスタイルの平均値をまとめたものである。多くの項目で「100万円～」が高い値を示し、「流行・革新」、「コミュニケーション」、「スペクテーター」、「芸術」の項目で統計的にも他の所得カテゴリーとの間で有意な差がみられた。

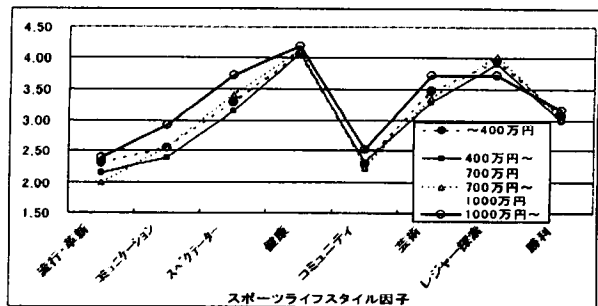


図4 所得別のスポーツライフスタイル

表17 所得別のスポーツライフスタイル

上段：平均値 下段：標準偏差

	流行革新	コミュニケーション	スベクテーター	健康	コミュニティ	芸術	レジャー探索	勝利
~400	2.31	2.55	3.28	4.06	2.30	3.47	3.94	3.05
400	1.02	0.94	1.14	0.70	0.91	0.93	0.85	0.67
400~700	2.16	2.39	3.14	4.06	2.31	3.28	3.91	2.98
700	1.00	0.89	1.14	0.64	0.95	0.98	0.86	0.74
700~1000	2.00	2.55	3.40	4.10	2.24	3.35	4.03	3.01
1000	0.92	0.86	1.17	0.67	0.90	0.87	0.86	0.75
1000~	2.38	2.92	3.71	4.18	2.52	3.72	3.72	3.15
1000~	1.06	0.90	1.01	0.60	0.97	0.86	1.13	0.78

5) 生活様式別のスポーツライフスタイル

生活様式、すなわち余暇スコア別にスポーツライフスタイル各項目の平均値を図示したものが図5である。ここでは前述の学歴、所得以上に差がみられ、「流行・革新」、「健康」以外のすべての項目で統計的にも有意な差がみられた。いずれも余暇スコアが高いほど各項目の平均値も高いという結果となった。

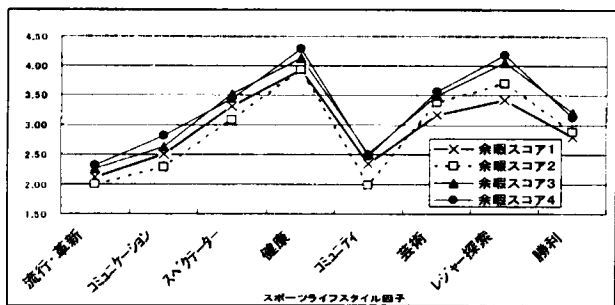


図5 生活様式別のスポーツライフスタイル

表18 生活様式別のスポーツライフスタイル

上段：平均値 下段：標準偏差

	流行革新	コミュニケーション	スベクテーター	健康	コミュニティ	芸術	ジャー探索	勝利
余暇スコア1	2.10	2.50	3.31	3.94	2.34	3.17	3.42	2.80
余暇スコア2	0.95	0.96	1.16	0.74	0.92	0.89	0.83	0.70
余暇スコア3	2.00	2.29	3.07	3.94	1.99	3.38	3.71	2.88
余暇スコア4	0.91	0.84	1.10	0.62	0.86	1.00	1.06	0.80
余暇スコア1	2.25	2.62	3.52	4.13	2.51	3.50	4.07	3.20
余暇スコア2	0.99	0.83	1.13	0.63	0.86	0.88	0.88	0.67
余暇スコア3	2.32	2.81	3.43	4.28	2.46	3.56	4.19	3.12
余暇スコア4	1.09	0.95	1.16	0.60	1.01	0.89	0.71	0.71

6. 会員のスポーツライフスタイルの類型化

会員のライフスタイルを明らかにするために、スポー

ツライフスタイルの8因子を用いてクラスター分析を行った。その結果、5つのクラスターが抽出された。

スポーツクラブ会員のクラスターごとのスポーツライフスタイル因子得点は表19のとおりである。クラスター1には49.6%と約半数の会員が属しており、クラスター2には約3割の会員が属しており、クラスター1とクラスター2に大半の会員が属しているといえる。クラスター1は「健康」と「レジャー探索」のスポーツライフスタイル因子が高く、他は全体的に低い値を示す会員である。クラスター2はすべてのスポーツライフスタイル因子で高い値を示し、非常に積極的なライフスタイルを持った会員といえる。

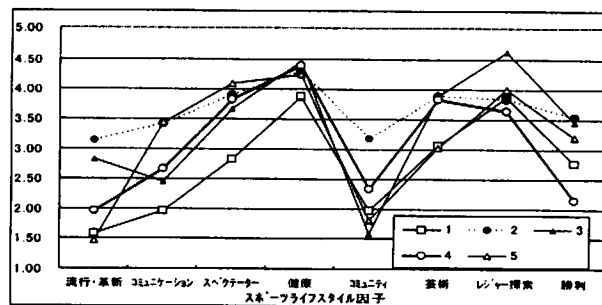


図6 会員のスポーツライフスタイルクラスター

表19 会員のスポーツライフスタイルクラスター

クラスター	n(%)	流行革新	コミュニケーション	スベクテーター	健康	コミュニティ	芸術	レジャー探索	勝利
1	134(49.6)	1.58	1.96	2.82	3.87	1.96	3.06	3.87	2.76
2	85(31.5)	3.14	3.42	3.89	4.28	3.18	3.88	3.84	3.54
3	20(7.4)	2.83	2.45	3.67	4.45	1.58	3.88	4.63	3.45
4	18(6.7)	1.96	2.67	3.81	4.39	2.33	3.83	3.64	2.15
5	13(4.8)	1.46	3.44	4.08	4.23	1.81	3.03	4.00	3.21
全体	270(100)	2.18	2.57	3.35	4.09	2.34	3.43	3.91	3.04

IV. まとめ

1. 民間スポーツクラブ会員の属性および社会階層

1) 性・年齢の特徴

会員の性別内訳では、男性38.5%、女性は61.5%となっており、女性が多い傾向がみられた。また年齢層が高くなるにつれてクラブ会員が増えていく傾向がみられ、特に60歳代以上の人数が37.8%と多くなっており、50歳代(24.1%)、40歳代(20.7%)、30歳代以下(17.4%)となっている。かつての民間スポーツクラブでは、20歳代、30歳代の男性と20歳代の女性が中心であり、年齢による大きな偏りが見られたが、今日ではそのような傾向はないことがわかる。

2) 社会的地位指標

かつてのスポーツクラブ会員のほとんどは、学歴、職業威信、所得も高く、また生活様式も高い社会の上層に位置する社会階層の人たちで占められていた。調査対象の会員の最終学歴は、高等学校卒業者が43%と最も多く

なっており、次いで大学・大学院卒(23.3%)、短期大学・専門学校卒(20.7%)、中学校卒(11.5%)の順となっている。職業では、正規の仕事についている人数(123人)より正規の仕事についていない人数(146人)が上回っており、その中でも主婦(30.7%)の比率が突出していた。生活様式においても、余暇スコアの高い人だけではなく、あまり高くない人も少なからず存在していた。所得に関しても大きな偏りはなかった。したがって、今日のスポーツクラブ会員は、社会的地位あるいは社会階層とはあまり関係なく、民間スポーツクラブも大衆化してきたと指摘できる。

## 2. 民間スポーツクラブ会員のライフスタイル

### 1) スポーツライフスタイル

8つのスポーツライフスタイル因子の中で「流行・革新」、「コミュニティ」に対する意識が低く、逆に「健康」、「レジャー探索」に関しては非常に高い意識を持っていることがわかった。このことは個人的な健康づくりや楽しみのためにクラブに通っているという民間スポーツクラブの特徴が表れているといえる。

### 2) ライフスタイルクラスター

クラブ会員のライフスタイルを明らかにするために、スポーツライフスタイルの8つの因子を用いてクラスター分析を行った。その結果、5つのクラスターが抽出された。その中で、「健康」、「レジャー探索」のスポーツライフスタイル因子が高く、他はいずれも低い値を示すクラスター1に約半数の会員が入った。また、ほとんどのスポーツライフスタイル因子で平均値より高く、あらゆるライフスタイルに積極的であるクラスター2に会員の約3割が入る結果となった。したがって、民間スポーツクラブ会員の大半はクラスター1とクラスター2の会員によって構成されていることがわかった。

## V. 総括(今後の課題と展望)

民間スポーツクラブ会員は、社会階層的に高い階層となっていることが言われてきた。しかし今日のスポーツクラブでは、そのスポーツクラブのコンセプトと同様に客層も多様化してきており、かつてのように社会の上層、若年エリート層(いわゆる上層予備軍)のような会員ではなくなっている。その理由としては、ステイタス・シンボリックな存在であったスポーツクラブが、健康の保持増進や体力づくり、といった生理的な欲求を満たすための場所に変わってきたからだろう。したがって、今日のスポーツクラブ会員は、社会階層という視点からみると非常に多様な社会階層となっている。ライフスタイルという視点からみると、「健康」と「レジャー探索」に強い

指向を持つ人々、およびあらゆるスポーツライフスタイル因子に積極的である人々によって構成されており、同じようなライフスタイルへの意識を持った人たちであることがわかった。

「社会階層」とは、多様な研究課題を含んだ領域である。本研究では、民間スポーツクラブ会員の社会階層を明らかにすることを目的として調査を行った。今現在の社会情勢は、めまぐるしく変化しており、もちろん今後めまぐるしく変化していくことが十分に予想される。それにとともに、社会階層をめぐる状況も大きく変化していくのは必至である。したがって、社会階層に関する研究は、今後より広域的で継続的かつ詳細な調査・研究が必要であろう。

## 参考文献・引用文献

- 1) 原純輔, 「階層構造論」, 安田, 塩原, 富永, 吉田編著, 基礎社会学4 社会構造, 東洋経済新報社, 1981.
- 2) 原純輔・盛山和夫, 社会階層~豊かさの中の不平等~, 東京大学出版会, 1999.
- 3) 原純輔, 近代化と社会階層, 東京大学出版会, 2000.
- 4) 今田高俊, 社会階層のポストモダン, 東京大学出版会, 2000.
- 5) 鹿又伸夫, 「社会階層とライフスタイル」, 金子勇, 松本洗偏, クオリティ・オブ・ライフ, 福村出版, 1988.
- 6) 北村尚浩, 「スポーツ参加者のスポーツライフスタイルとコミュニティ感情」, 体育学研究 41: 437-448, 1997.
- 7) Loy, J.w., B.D.McPherson, G.S.Kenyon, Sport and Social Systems, Reading, Mass.: Addison-Wesley, 1978.
- 8) Luschen, G., "The system of sport-problems of methodology, conflict and social stratification." In G.Luschen & G.H.Saga (eds.), Handbook of Social Science of sport, Champaign: Stipe, 1981.
- 9) 丸山富雄・菅原禮・日下裕弘, 「スポーツ参加者の階層構造に関する研究」, 仙台大学紀要 18集: 11-23, 1986.
- 10) 丸山富雄, 日下裕弘, 「一般成人のスポーツ参加者と社会階層」, 仙台大学紀要 20集: 19-36, 1988.
- 11) 丸山富雄, わが国における階層構造とスポーツ参加の研究, 昭和62・63年度文部省科学研究費研究成果報告書, 1989.
- 12) Renson, R., "Social status symbolism of sport stratification." In F.L.Landry & W.A.R.Orban (eds.), Sociology of sport, Symposia Specialists, INC., 1978.
- 13) 菅原禮, スポーツ社会学への招待, 不昧堂出版, 1990.



- 14) 富永健一, 日本の階層構造, 東京大学出版, 1984.  
15) Veblen, T.B., The Theory of Leisure Class, New

York : Macmillan, 1899. (ヴェブレン, 小原敬士訳,  
有閑階級の理論, 岩波文庫, 1961)